

# 日本ミルトン協会第 12 回研究大会

## 研究発表資料

於：青山学院大学青山キャンパス

日時：2021 年 12 月 11 日 (土)

## 対面・オンライン同時開催に際して

### ○大会への参加方法

本大会は対面と Zoom ミーティングにて開催されます。Zoom への参加アドレスは、大会 1 週間前の 12 月 4 日と大会前日の 12 月 10 日 13 時頃に、メーリングリストを通じてお知らせします。なお、新型コロナウイルスの感染拡大の状況と開催校の都合により、オンラインのみの開催となる場合があることもご承知ください。開催形態に変更が生じた場合、メーリングリストとホームページを通じてご案内いたします。

### ○メールアドレスご確認のお願い

事務局よりご連絡をする際に会員宛の一斉メールをお送りしていますが、これまでにメールが届いていない先生方、葉書でのご連絡のみでメールアドレスを事務局にお知らせいただいていない先生方におかれましては、協会のアドレス [john.milton\[at\]maj.gr.jp](mailto:john.milton[at]maj.gr.jp) まで、メールアドレスをお知らせください。

12 月 4 日 13 時頃に大会のアドレスを掲載した最初のメールお送りします。12 月 5 日までにメールが不着の場合には、大変お手数ですが、上記アドレスまでご連絡ください。

以下、Zoom でご参加される先生方へのご案内です。

### ○研究発表のハンドアウト

研究発表のハンドアウトは、大会前日の 12 月 10 日 13 時頃に配信するメールに添付する予定です。また、大会当日も添付ファイルとして配布します。

### ○研究発表中

研究発表中はマイクとカメラをオフにさせていただきますようお願いいたします。質疑応答時、発表者と直接お話になる時はマイクと（可能であれば）カメラをオンにしてください。

### ○総会資料

総会資料は、大会前日の 12 月 11 日 13 時頃に配信する、大会アドレスを記載したメールに添付する予定です。当日も添付ファイルとして配布します。

# 日本ミルトン協会第12回研究大会プログラム

日時 2021年12月11日(土) 14時00分より[13時50分受付開始]

場所 青山学院大学青山キャンパス 17号館 17407教室

Zoomによるオンライン同時配信[13時50分より入室可]

○委員会 (12:30~13:40) 17号館 17407教室

○開会の辞 (14:00~14:05) 会長 富樫 剛

○研究発表 (1. 14:10~14:50 / 2. 15:00~15:40)

1. 『楽園の回復』における誘惑のシーケンスに関する一考察

——共観福音書との比較を手がかりに

上滝 圭介

司会 西川 健誠

2. フランス革命における Satan のイメージ

天海 希菜

司会 川島 伸博

○休憩 (15:40~15:50)

○総会 (15:50~16:20) 司会 富樫 剛

1 活動報告

笹川 渉

2 2020年度会計報告および会計監査報告

花田 太平、金崎 八重・桶田 由衣

3 2021年度予算審議

花田 太平

4 7月研究大会、12月研究会とすることについて

富樫 剛

5 来年度の活動予定

富樫 剛

6 大会の出欠を葉書からオンラインにすることについて

笹川 渉

7 論集の発行について

富樫 剛

8 その他

○閉会の辞 (16:20~16:25) 会長 富樫 剛

## 研究発表 1 :

『楽園の回復』における誘惑のシーケンスに関する一考察——共観福音書との比較を手がかりに

上滝 圭介 (埼玉医科大学)

『楽園の回復』(1671年)においてミルトンは主に、新約聖書で描かれる荒れ野の試み、すなわち受洗後のイエスの霊的体験から材を得ている。前作『楽園の喪失』(1667年10巻本出版、1674年12巻本に改訂)の続編にふさわしい題材として、地上における御子イエス対悪魔サタンの弁舌による戦いを選び、そしてまた、壮大なスケールの一大叙事詩である前作と対比させるかの如くに前作の5分の1程度の分量でコンパクトに歌いあげ、ルネサンス期より流行していた(biblical) brief epicの流儀を踏まえながら、詩人はその卓越した力量を世に示した。

イエスの被る誘惑のエピソードは共観福音書それぞれに記載があり、「マタイ福音書」は全11節、「マルコ福音書」では僅か2節のみ、「ルカ福音書」においては全13節の分量である。人間イエスがサタンから誘惑を受けて退けるといふ大筋はもちろん各書に共通するのだが、言葉遣いや細部は異なり、ダイジェスト版ともいえる「マルコ福音書」では誘惑の内容については何も語られていない点など、各書の記述には相違が認められる。特に「マタイ福音書」と「ルカ福音書」においては3つの誘惑について詳述されているが、それらの誘惑の順番に異同がある。『楽園の回復』における3つの誘惑の配列はというと、「ルカ福音書」に準じており、ミルトンの描く悪魔も「ルカ福音書」と同じく、パンと王国と塔それぞれにまつわる3つの誘惑を、イエスに対してこの順序で仕向けるのである。

では、ミルトンはなぜ「ルカ福音書」の順番を採用したのだろうか。作品中盤を占める第2の誘惑(王国の誘惑)をさらに細かな5つの試練(饗宴、富、栄誉、イスラエルの解放、知恵)に仕立てなおし、第3の誘惑(塔の誘惑)を効果的にクライマックスに配置するという作劇上の都合は想像に難くない。しかしそうだとすると「マタイ福音書」や「マルコ福音書」から得るべき材料は果たして何もなかったのだろうか。本発表は『楽園の回復』における誘惑のシーケンスの構成について、John Carey や Barbara Lewalski、

Elizabeth Pope らの指摘を確認しながら、共観福音書の該当箇所と比較考察するものである。

## 研究発表 2 :

### フランス革命における Satan のイメージ

天海 希菜 (日本大学大学院)

フランス革命におけるミルトンの Satan については、多くの著名な作家や詩人が革命側と政府側に分かれて意見を述べている。Chateaubriand (1768-1848) は Satan を、自らの地位を捨て民衆に渡った者として描いている。一方で La Harpe (1739-1803) は革命の指導者たちを Satan に見立て、群衆を Satan の取り巻きと擬えている。本発表ではミルトンの Satan がどのようにフランス革命において捉えられていたかを、主に挿絵から読み解き、当時の絵画や風刺画と比較・考察していく。

フランスで初めて *Paradise Lost* (1667、仏題 *Le Paradis perdu*) が言及されたのは、Pierre Bayle (1647-1706) が 1697 年に出版した *Dictionnaire historique et critique* である。当時ミルトンは反王党派としてフランス国内では認識されており、とりわけ英語で書かれた長編叙事詩は敬遠されていた。そのため最初にフランスで出版された *Paradise Lost* は、1730 年に Nicolas-François Dupré de Saint-Maur (1695-1774) という経済学者が翻訳したものである。*Eikonoklastes* (1649) は 1652 年にはすでに仏訳され、出版されていることと比べると、王政復興まで精力的に執筆活動をしていたミルトンに対していかに当時のフランス政府が慎重な姿勢を持っていたかがわかる。

*Paradise Lost* は、Dupré de Saint-Maur も含めて、現在に至るまで 16 回仏語への翻訳がされてきた。そのうちの 5 冊はフランス革命前であり、残りの 11 冊は革命後である。実際、Jean Gillet は著書 *Le Paradis Perdu dans la littérature française de Voltaire à Chateaubriand* の中で「革命の最中、『楽園の喪失』は忘れられたようだ。」(483, “Pendant la Révolution, le *Paradis perdu* semble oublié.”) と述べている。しかし革命中の 1792 年に Jean-Frédéric Schall (1752-1825) による挿絵入りの *Paradise Lost* (Dupré de Saint-Maur 訳) がフランスで出版されている。また革命前にはフランス人画家 Louis Chéron (1660-1725) がイギリスで出版された Tonson 版 *The Poetical Works of Mr. John Milton* (1720) の挿絵を手がけており、革命後は同じくフランス人画家 Gustave Doré (1832-83) が、こちらもイギリスで出版された Cassell 版の *Paradise Lost* (1866) の挿絵を手がけている。それ

ぞれ異なる時代と需要の中で、どのような **Satan** を描き、どのようにフランス革命との繋がりがあるのかを明らかにする。

